

## 令和5年度第1回物部川地域アクションプランフォローアップ会議 議事概要

日時：令和5年9月12日（火）14:00～16:30

場所：南国市役所 4階 大会議室

出席：委員19名中、12名が出席（代理出席1名含む）

- 議事：（1）産業振興計画関連会議 年間スケジュールについて  
（2）物部川地域アクションプラン 実行3年半の取り組みの総括について  
（3）物部川地域 地域産業クラスタープロジェクト実行3年半の取り組みの総括について

議事（1）（2）（3）について、県から説明し、意見交換を行った。（主な意見は下記のとおり）  
議事については、すべて了承された。

※意見交換概要（以下、意見交換部分は常体で記載）

- （1）産業振興計画関連会議 年間スケジュールについて  
意見交換等、特になし。

- （2）物部川地域アクションプラン 実行3年半の取り組みの総括について

(No.16 土佐山田えびす商店街を中心とする地域の活性化)

（寺村委員）

空き店舗があっても、家主の意向や改修繕費の問題等の課題が多い。空き店舗を売却すれば、すぐに取り壊して住宅にすることが多いので、商店街の商業機能は失われつつあり、住宅地化してきている。

そのような中でチャレンジショップの在り方を考えていかなければいけない。商店街の中で店舗を経営し、商売として成立させるのは全国的にも難しいので、チャレンジ工房のような形で、そこで作ったものをオンラインショップで販売したり、数量限定でふるさと納税の返礼品としたりできるような仕組みや、高知空港からの利便性を生かして、チャレンジショップをサテライトオフィスとして使用するなど、新しいチャレンジショップの在り方を考えていきたい。

（三浦地域産業振興監）

昔からの商店街においては、住宅兼用の店舗が非常に多く、住宅地化している地域もあり、空き店舗を活用した新規開業数というKPIの設定が現状に即していないことが反省点である。ただ、それに代わる指標の設定については、大きなエリアを中心市街地として位置づけている南国市や香南市と、商店街の道筋を発展振興を目指す位置づけている香美市とで状況が異なっているため、次期計画策定にあたっては、皆さんの知恵を借りながらKPIを設定したい。

(No.6 「ごめんケンカシャモ」のブランド化の取り組み)

（杉村委員）

コロナの影響でシャモを取り扱ってくれる料理屋がない状態が3年ほど続いた上、一番使ってくれていた店舗が閉店したため、販売力が大幅にダウンした。こういった状況を打開するた

め、4～5年後の黒字化を目指して今春から事業計画の見直しを行っている。併せて、白山委員のお店ではチャーター便で来た台湾の観光客に、シャモは非常に好評だと聞いた。台湾のテレビ番組等で高知県が紹介されることもあると聞いており、飲食店も含め台湾人観光客が多く訪れることを期待したい。

(三浦地域産業振興監)

営業は上向きとお聞きしている。高知市内に直営店が1店舗あり、飲食店への卸売りがストップしても、一定の売上げを確保できるのは強みと認識している。増産と安定供給、営業力の強化が今後の課題と認識している。南国市とも連携しながら、引き続き支援を行っていく。

(地域観光課 中村課長)

チャーター便の延長が決定しており、現地で観光コースを売り込んでいく。ここのポイントを売り込んでもらいたいといった希望があればぜひ言っていただけたらと思う。

(白山委員)

台湾人観光客はすぐにSNSに載せる傾向にあるが、投稿された写真では、シャモの量が少ない印象。台湾人は鶏肉料理や温かい料理を好むのでシャモを売り込んでいくための協力をお願いしたい。

(No.1 日本一のニラ産地拡大クラスタープロジェクト)

(No.11 ヤ・シィパークを核とする地域の活性化の推進)

(丸岡委員)

ニラについて、地産地消で消費拡大を目指すなら、地元のニラを購入できたらよいが、地域のスーパーでは売っていない。地元のニラを応援する術がないように感じる。また、香南市観光協会が販売しているニラ塩焼きそばのタレの売上げが好調であるにも関わらず、KPIのひとつになっているニラメニューの売上げは少ない。評価はDとなっているが、目標設定自体がおかしいと感じている。

ヤ・シィパークについて、加工所兼店舗の目標売上高の設定が高すぎて、今の生産能力では達成不可能である。他の地域では、観光消費額を指標としているところもあり、ヤ・シィパークを訪れる方が増えることで、物部川エリア内の観光消費額の増加にも繋がるはずなので、「道の駅やす」の入込数でなくそういった部分も意識して次期計画のKPIを設定していただきたい。

(三浦地域産業振興監)

ニラメニューの売上高とするKPIについては、加工食品の原材料をイメージしていたがそれが叶わなかったことから、次案としてニラを活用した売上げを検討したが、個々の店舗の売上げの把握は困難なため、観光協会が把握しているイベントでの売上高に落ち着いた経緯があり、実績は少額で、また、コロナのため非常に厳しい状況となっている。次期の計画に向けて、委員と同じ考えを香南市でも持たれていると考えているので、協議させていただきたいと考えている。

ヤ・シィパークについては、商工業の分野に位置づけられているため、次期計画では、商工業と観光のどちらで分類すべきか整理し直す必要があると考えている。「道の駅やす」の入込客数や全体の入込客数、売上げをKPIとして設定するならば、観光分野に整理し直すのが適当ではないか。2階の飲食店とアイスバーの売上げは、アイスバーの整備に活用した補助事業の際

の事業計画の目標値がそのまま使われているが、環境変化もあることから目標の達成は難しいと受けとめている。次期計画に向けて、現状の目標値に達しないまでも、アイスバーの販売拡大については今後も取り組んでいくということで話を進めたい。

(No.3 南国市野菜の地産地消・地産外商の拡大による地域農業の活性化)

(No.4 香美市における「物部ゆず」の総合的な産地強化対策)

(陶山委員)

南国市の還元野菜について、販売先がトリムユーザーに限られているということは、今の売上げで頭打ちではないかと思う。今後、売上げを伸ばすにあたっての考えがあれば伺いたい。また、野菜自体の成分に差はないとしても、使用農薬を減らせれる、環境にやさしい等、他のアプローチの仕方で広報はできないのか。

「物部ゆず」の産地強化について、県内で新規就農者を取り合っている状況の中で、物部地域にゆず農家として就農したい人を取り込む手立ては具体的に何かあるか。また、園地の流動化について、他の地域の先進的な事例で学べるものがあれば伺いたい。

(三浦地域産業振興監)

南国市の還元野菜については、トリムの会員向けの販売だけでなく、西島園芸団地や南国スタイルなどでも還元水が活用されている。還元水の効果については、高知大学で現在も研究していただいているが、一般の消費者にPRできる明確な材料がないということが苦しいところ。一方で、トリムとしては農業分野に参画されたい意向があることから、引き続き情報交換を行いながら進めていきたいと考えている。

(中央東農業振興センター 豊永所長)

「物部ゆず」について、先日、物部ゆず部会の方々と協議しまして、新規就農者を確保するにはまずは基盤整備が必要ということで、その事業を紹介している。耕作放棄地などの空いている農地を整備し、そこに新植して成木になれば新規就農者に渡すようにできれば良いと考えている。それまでの期間は、市の農業公社に管理してもらうことが理想ではあるが、香美市には農業公社がないため、その仕組みを今後どのように確保していくのが課題。今後もゆずを守る取り組みに力を入れていきたい。

園地の流動化について、物部地区で園地が固まっているのは大栃の奥の方の園地が急峻で、条件があまり良くないところなので、そこを流動化するより、香北地区で栽培するというのも1つの例としてある。「物部ゆず」のブランドを守るためには、条件の厳しいところを流動化するより、平地で防除や草刈りが機械化でき、管理が比較的簡単にできる圃場を作る方が良いと思う。

(陶山委員)

香北町で作っても「物部ゆず」を名乗ることはできるのか。

(中央東農業振興センター 豊永所長)

「物部ゆず」はGI(地理的表示)を取っており、物部町大栃の集出荷場に集められるので「物部ゆず」を名乗ることが出来る。

(No.4 香美市における「物部ゆず」の総合的な産地強化対策)

(近藤委員)

「物部ゆず」について、新規就農者を育成するにあたり、既存の農家の負担になっている部分がある。新規就農者の育成をサポートする人がいれば良いと感じる。

(中央東農業振興センター 豊永所長)

指導農業士が新規就農者の育成を担っている。一方で、自分の園地の一部を貸して、一人前に育て、他の農場主が辞める際に、その方の園地を引き継いでいくという方法もとっている。ただ、それだといつ引き継げるか先が見えないので、基盤整備や新植をして育成をしていく仕組み作りが必要と感じている。

(No.16 土佐山田えびす商店街を中心とする地域の活性化)

(近藤委員)

商店街の空き店舗の話について、店を構えたい方の中には、昭和な雰囲気が残った物件を気に入る方もいる。「さかさま不動産」というモデル事業があり、入居者向けに物件を紹介するのではなく、入居希望者が物件でやりたいことを発信して物件の掘り起こしを行うもの。そうすると、入居者の人となりや取り組みが見えるようになるので、地域の方々も受け入れやすい。このような、一步踏み込んだ取り組みもあったらよいと感じる。

(No.23 香美市における滞在型・体験型観光の推進)

(吉井氏 (岡村委員代理))

香美市は観光面で「ゆず玉日本一」をアピールできていない。一方で、香美市が主催する「かみめぐり」でのゆず狩りのイベントはすぐに定員が埋まったと聞いている。観光協会としてもよりゆずをアピールする体験を考えていきたい。

ここ3年では、観光ガイドの会を立ち上げて体験型メニューを出しており、まだ成果につながっていないが、継続して伸ばしていきたい。また、べふ峡温泉についても、コロナが落ち着いても客足が戻っていないため、集客に向けて「いざなぎ流」や「アメゴ釣り」のような様々なイベントを企画している。

(No. 1 日本一のニラ産地拡大クラスタープロジェクト)

(古川委員)

そぐり作業をお願いできる方が非常に少なくなっている中、JAでは「そぐりセンター」にかなり力を入れていただいております、ありがたいと感じている。

一方、近年、猛暑や局地的な豪雨により、夏場のニラの品質保持に苦労している。こういった現状に対応するために、何か研究はしているのか。

また、日本のニラは海外のものと比較して甘くておいしい。台湾人もニラを食べる文化があるので、台湾にも販売ルートを開拓していけるのではと思う。

(中央東農業振興センター 島本技術次長)

ここ数年の猛暑により、大変ご苦労されていることと思う。品質を保持するためには、収穫後のニラの品温をどう抑えていくかが非常に大切。例えば、須崎市のミョウガ農家では、作業場にエアコンをつけることで、室温を上げないようにされているが、そういったことを全ての

個人の農家をお願いするのも難しい。品種や作り方なども含め、品質保持のためどのような研究ができるか、検討をしていきたい。

ニラ輸出については、香美地区産のニラを海外に輸出するための検討が始まっている。実現の見通しは不透明であるが、高知県のニラ・ネギ類は、他県のものと比較して品質保持ができるパーシャルシール包装という包装形態をとっており、輸出には非常に有利。輸出先の残留農薬基準等があり、すぐに実現できるものではないが、この地域の日本一のニラを海外の方にもお届けできたらと思う。また協力のほどお願いする。

#### (No.18 物部川地域における広域観光の推進)

(白山委員)

教育旅行の予約が増加している。南国市には、掩体が残っているが、これについて説明できる語り部が、高齢の方1人のみということもあり、昨年教育ビデオを作成した。良いものができたので、今後教育旅行を誘致する際にアピールしていきたい。

観光ガイドは高齢者が多く、一観光協会の取り組みでなく、物部川DMO協議会と3市が協力して、観光ガイドを地域で育てていく取り組みをしていきたい。佐川町へ訪問した際、ボランティアガイドのスキルが高く、観光案内人の育成が重要だと感じた。ぜひ一緒に取り組んでいただきたい。

(平山座長)

観光ガイドの高齢化が進み、新しいガイドを養成するための取り組みは3市それぞれ考えていかなければならない。また、各市の観光ガイドの会が情報共有しながら、効果的な観光ガイドの養成方法について検討していきたい。県の方では、何かこれに関する取り組みはないか。

(地域観光課 中村課長)

観光ガイドの連絡協議会があり、掩体のガイドの方も加盟していただいている。その中で、勉強会をしたり、団体ごとの勉強会や視察研修には、補助制度を設けたりしているのでぜひご活用いただきたい。

また来年度、牧野博終了後の展開としては、地域ならではの文化や暮らしを見せていく観光を進めていく予定である。ぜひ一緒に取り組みを進めていきたい。

#### (No. 1 日本一のニラ産地拡大クラスタープロジェクト)

#### (No. 4 香美市における「物部ゆず」の総合的な産地強化対策)

(森田委員)

ニラについて、JAとしては生産者の所得向上のために、県外市場での相対取引で、数量確保のために奮闘している中、販売するニラが不足している状態。単価もそこそこでコロナ禍においても順調に売れている状況だが、生産資材の高騰により、農家への手取りは少ない。昨日、農政会議が、県に価格転嫁の要請を行っている。政府主導で動かないと価格転嫁は難しく、消費者の理解も必要であり、価格転嫁は難しいと思うが、声をあげていかないと実現しないと思っている。

ゆずについて、JAではPR材料として、YouTubeに歌を作成して公開している。また、県外では「マルブツゆず」として、「物部ゆず」の認知度は高まっている。コロナが5類になったこと

で、単価も上がってきており、農家の手取りは増えてきていると感じる。

様々な課題がありつつも、農家のために取り組みを進めているところではあるが、関係機関の協力がないと農家を増やすことは難しいと思う。皆さんの協力をよろしくお願いいたします。

#### (No.8 シイラ等の水産物加工による外商の拡大)

(中田委員)

手結支所のシイラの水揚げ量に関する報告として、一定売り先は確保できた状態ではあるが、5月から11月が漁期で、年平均400トン前後揚がるところが、今年は8月末時点で95トン程度しか揚がっていない。今年は、過去に例がないほどの不漁で、生産者の胸の内は痛いほど感じている。

生産者を守るためにも、不漁の時でも何かできることはないかと考えている。また皆さんの知恵をお借りしたい。

(杉村委員)

需要の拡大が不漁の要因か。

(中田委員)

様々な要因が重なったためと思われる。

(平山座長)

一昨年も不漁だった。自然の影響を受けるので、なかなか対応が難しいのではと思う。不漁の原因を想定しながら、今後の対応についても、次期計画に向けてまた検討をしてほしい。

#### (No.4 香美市における「物部ゆず」の総合的な産地強化対策)

#### (No.7 物部川地域の民有林における原木の増産)

(石川委員)

県は原木生産量79万m<sup>3</sup>を目標としているが、人材不足で困っている。今は作業員の世代交代が始まったところで、林業大学校の卒業生が来てくれるのは嬉しい。しかしながら、卒業後3年は、現場を把握できていないためやはり生産率が落ちてしまう。

また、香美森林組合では、林業機械を入れて近いところから採っていたが、これからは架線集材が中心となる。架線集材になると、能率が落ちる上、山主へ返す金額も減ってくるため、材木の価格が一定ないと組合としては切りたくない。しかし、今の若い山主は、自分で植えて下刈りする経験がないため、すぐ売りに出してしまう。組合に対して木材だけでなく土地も買ってほしい、土地や田畑を今の時代に処分したいというのが本音であり、これから1番問題になってくることだと思う。

高度成長期時代から、自分の敷地に木を植え始め、地域外に出てしまっ、またその土地で暮らそうとしても、木が陰になって住めなくなっている。何かこういったことを解決する方法も考えてもらいたい。

「物部ゆず」については、物部で植えられた経緯も知っている。物部町は、傾斜地があり、水はけが良いため、身の締まった腐りにくいゆずができる。今、香北町周辺でもゆずを生産しているが、腐りが出て「物部ゆず」の品質が落ちたと言われるのではと心配している。

また、香北町は蕪生米の産地なため、水田とゆず畑、それぞれへの農薬散布について、十分配慮しなければいけないと感じている。

(3) 物部川地域 地域産業クラスタープロジェクト実行3年半の取り組みの総括について  
意見交換等、特になし。

(以上)